

公益社団法人
中部日本書道会

濃飛

濃飛支部会報
第7号

●発行●
平成30年2月
濃飛支部広報部
電話 0573-65-6982
FAX 0573-65-6982

●印刷●
(株)協和印刷工業

題字 故永治秋聲

支部長新年のご挨拶



新年明けましておめでとうございます。寒さ厳しい中、会員の皆様には輝かしい新春をお迎えの事とお慶び申し上げます。

昨年の七月、濃飛支部長を総会にて再任頂き、三期目を務める事となりました。日頃力不足を痛感してはいますが、もう一期と思いつ張りたいと思います。

昨年は濃飛支部三十二周年として下呂にて支部展・総会・講演会・交流会を開催致しました。作品も七十四点と会場いっぱいになり、大勢の方のご高覧を頂き賑わしい中終了しました。

秋の研修旅行は諏訪大社・康輝堂美術館にて信州の一日を楽しみました。

今年度は濃飛支部にも新しい風が吹きました。高山市より三名の方に入会頂き、支部を盛り上げて頂いています。

残念ながら訃報もあります。下呂の谷川景仙さんが昨年のお暮れお亡くなりになりました。享年九十四歳との事です。御冥福をお祈り申し上げます。

本部の行事ですが、今年六月には中部日本書道会の書道展が開催されるわけですが名古屋市の友好姉妹都市、中

石原 聲風

国江蘇省の書家の作品も多数展示されます。

研修旅行・講演会・講習会等多々あります。是非皆さまのご参加をお願いします。

私事ですが、毎日筆を取り、勝手に書いています。

書くことに疲れると、午後は農業に取り組み体を動かしています。主体はやはりお米作りで、春から秋にかけては大変いそがしいですが、十月には約一〇〇俵のお米を収穫します。採れた時はやはり気分がいいものでお酒も少し進みます。

さて、三十年度の支部行事も既に行っています。本年は恵那での展示会開催となります。

書道を通して会員・地域の皆さんと交流を図る、又書の文化の普及が少しでも出来たらとそんな思いでいっぱいです。

今回第七号の濃飛支部会報を発行するに当たり役員・会員各位の方に感謝申し上げますと共に支部活動に於いて会員皆様のご支援、ご協力を、お願い申し上げます。

平成二十九年 濃飛支部集会

日時 七月九日
会場 湯之島館(下呂市)

支部展の片付けを終え、交流会館から湯之島館に移動しました。湯之島館は由緒ある老舗旅館で大木に囲まれた山の上にあります。その大広間をお借りして集会が開催されました。来賓に中日書道会理事長の関根玉振先生に御臨席戴きました。

二十八年度事業報告収支決算報告がなされ全員一致で了承されました。次に二十九年度事業計画案、予算案が提案されました。慎重審議の上全員で可決されました。



濃飛支部役員

常任顧問	今井 仙童
顧問	市川 恵一
参与	中川 貴舟/森 京華
支部長	石原 聲風
次長	増田 春暉/中垣 幸聲
	倉地 西萩/三野島凌雲
庶務担当	松田 秋芳/阪田 華香
	成瀬 伸芳
経理担当	長谷川秋峯/西 恵香
	斉藤 千秋
会員担当	大野 聲泉/野村 香泉
	工藤 雅翠

事業担当	林 幸湖/今井 瑞華
広報担当	田口 秋水/堀川 洋子
	中垣 幸聲/虎井 姚花
	市川 純慧/田中 凌山
監事	佐口三奈子/小南 黄華
	担当部長 副部長

第三十二回濃飛支部展

会期 七月七日〜九日
会場 下呂交流会館

出品点数 六十九点
賛助出品 五点

本部より理事長関根玉振先生、副理事長伊藤仙游先生、岡野楠亭先生、松下英風先生、事務局長大池青岑先生の貴重な作品を展示して頂き支部展に華を添えて頂きました。出品も昨年より多く高山市よりの会員も増え、より盛況に盛大に展示を終える事が出来ました。入場者も東浦町や名古屋、高山市からも来て頂き三百名を超えました。



濃飛支部展の感想

松田 秋芳

開催地が持ち回りで中津川、下呂、恵那の順で今回は下呂市交流会館でした。

関根理事長さんをはじめ副理事長さん方の賛助出品も頂き、名古屋まで行かずとも貴重な作品を間近に見られ、とても有り難かったです。又会員の方の中日展出品作品、他に小作品一点、又会員外の方も出品あり賑やかな展覧会でした。皆様の力作を見させて頂いた日本は素晴らしい伝統文化がずっと継承される事を願っています。自分は多忙を理由に練習不足を反省しきりです。会員一同一丸となって尽力され成功裡に終わりよかったです。特に地元下呂の方々には大変お世話になりました。又、多くの方に参観して頂き嬉しく思いました。

講演会

「ひとつの道を究める」

今井 玉峰



平成九年に生涯学習実践事例集「私と生涯学習」(九十九人の実践)という

岐阜県教育委員会から発刊された冊子がある。民謡、読書、詩吟、活け花、音楽、歌舞伎等々様々な活動を究めた人達の内容が投稿されていてすばらし

い。恵那、中津、高山方面の方も多く投稿されている。下呂の欄で、何故か私が投稿させて頂いているがその経緯は覚えていない。当時、町主催の「公民講座」で冠婚葬祭の表書き等、実用習字が習いたくて参加した。ところが終了後も師(森京華先生)の熱心な指導にその奥の深さを知り、地域事業への協力(歌舞伎の祝儀書き等)そして友との和の大切さに魅せられて今も続いている。投稿の内容はそんな事を書いている。その時点でもう十年続いていたから更に二十年。作品の出来、不出来はともかく三十年という年月の継続は大きい。今年の「中部日本書道会濃飛支部展」は下呂市森の下呂文化交流会館にて三日間。高山、下呂、中津、恵那の会員と本部の先生の作品を含め七十四点を展示、多くの方に観覧いただいた。終了後、場所を下呂温泉湯之島館に移し、かつて今上天皇のお泊りになられた特別室「雲井之間」に於いて、下呂市乗政の日本画工房「篁」を主宰される島田智博先生の「付立て、日本画を楽しむ」と題して実演を交えながら講演を頂いた。「付立て」とは日本画技法の一つで輪郭、下書きを用

いず、いきなり墨の具で濃淡をつけながら一気に陰影や立体感を表す。目前でさらさら仕上げるすばらしい作品の筆先に見とれ只々感激。お持ち前の才能はもろろんだが学ぶからに



いず、いきなり墨の具で濃淡をつけながら一気に陰影や立体感を表す。目前でさらさら仕上げるすばらしい作品の筆先に見とれ只々感激。お持ち前の才能はもろろんだが学ぶからに

は一つの道を究めることの大切さを、先生の姿勢から学ばせていただいた。「明日死ぬと思つて生きなさい」「永遠に死なないと思つて学びなさい」

マハトマ・ガンジー

交流会

倉地 西萩

日時 七月九日
場所 湯之島館(下呂温泉)



昭和51年に天皇陛下がお泊りになられ、また国の有形文化財としても登録されている由緒ある老舗旅館の大広間に、関根玉振先生はじめ講演会で水墨画の楽しみ方を披露していただいた島田智博先生御席のもと乾杯し沢山の美味しい料理をいただきながら歓談が始まりました。合間には斉藤千秋先生の詩舞で盛り上がり、ギター演奏と雰囲気は心地よいものでした。関根先生には、書について尋ねる人、島田先生には、墨絵について興味深く聞き入る人、互いにビールやお酒を酌み交わし、時はあつという間に過ぎ、楽しい有意義なひとときを過ごすことができました。

高山・下呂・恵那・中津川と広範囲にわたる支部会員の唯一一年一度の交流会の大切さを感じることができました。誰もが年齢や生活は異なっても書にむ

かう思いは同じ仲間であると感じた交流会であったと思います。

研修旅行

信州の旅

中垣 かづ江

研修旅行に参加させて頂いたとき、康耀堂美術館と出会うことが出来ました。

その建物は八ヶ岳の麓、広大で静寂な森の中に凛として佇んでいました。学芸員の方の案内やパンフレット等で、佐鳥電機株式会社の前会長である、故・佐鳥康郎氏のコレクションが収蔵されている場所であることを知りました。

たとえ無名の作家でも自分の琴線に触れる作品を、というポリシーによって多くの作品を蒐集、さらに美術館を二〇〇一年に開館、佐鳥氏急逝後は、未来ある美術館とするため、遺族により二〇〇五年に京都造形芸術大学に寄贈され、二〇〇六年四月、大学付属美術館となり、佐鳥氏の思いは引き継がれることとなった。



そんな、強い信念を持って生きたい人。何事も夢と情熱を持って暮らさねば、人生もつたない...と深く感じた一日でもありました。

第67回中日書道展 入賞・入選者

- 準大賞 三野島凌雲
- 準特選 工藤 雅翠 / 成瀬 伸芳
- 秀 逸 渡辺 敬月
- 一科入選 磯村 小園 / 堀川 洋子
- 佳 作 鈴木由木江 / 友紀
- 二科入選 野村 香泉
- 中垣かつ江

準大賞 受賞者 三野島 凌雲



このたび、第67回中日書道展において、準大賞を受賞いたしました、大変光栄に存じています。これもひとえに榑本樹郎先生をはじめ諸先輩の御指導の賜物と深く感謝を申し上げます。

作品は、清の鄧完白の書体で、隷書を中心に創作をしています。鄧完白の肉厚の太く強靱な筆跡に惚れ、彼の精神が発する声に「疎なるところは馬をも走らすべし。密なるところは風をも透さしめず」との隠喩がさらに深い意味を帯びて迫ってきます。

引き続き、作品を沢山書き込み、「個性」を出す作品・魂を入れた書の表現に努め、力強さ・勢いのある作品創作に心掛けて行きたいと存じます。

書は、書く人の個性が出ると言われますが、私は創作において次の言葉を重要視して行きたいと考えています。

現存する中国の最古の音楽を論じた著述である「楽記」の一節に、『徳成而上。芸成而下。行成而先。事成而後。』の一文があります。これは、「徳の完成した者が礼樂の本質の実現にすぐれた実績を持つ者が上位に位し、単なる技芸の練達は下位に位置します。また、徳行の完成した人格者が優先し、実務をこなせる技術者は二次的

に扱われます。」の意であります。技術より人格を優先するこの論は、中国の芸術論で近世以降において、非常に顕著になり、技と道ははつきり区分され、道が技よりも上位に置かれていられるとされています。まさしく技、道、芸、徳の四位一体の心掛けが重要なことを示唆してくれまます。

書の本質は、言うまでもなく、文字の上人間の生命の躍動が真率簡潔に表現されるもので、その筆者の精神、感情、境遇が現われると言われ、人柄がもるに見えてくる書への関心は途絶えることはないと考えられています。

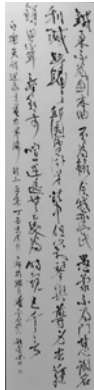
濃飛支部に本部から移籍した年度に受賞いたしました。が、もともと永治秋聲先生に御指導を仰ぎ濃飛支部に所属してまいりましたので、濃飛支部の発展に微力ではございますが努めて参る所存でございます。

最後になりますが、諸先生の御指導御鞭撻を仰ぎながら、たゆまない努力と精進を重ね、肉豊かにして骨つよく、気魄充滿した重厚な書に心掛けたいと存じます。

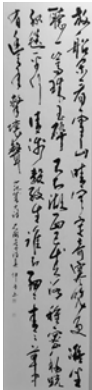


準特選受賞作品

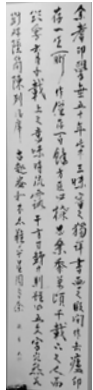
工藤 雅翠



成瀬 伸芳

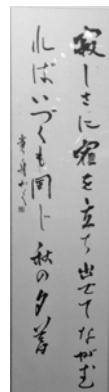


渡辺 敬月



第二十六回 壽展 出品者

中川 貴舟



森 京華



中垣 幸聲



「美しい文字を書こう！」

書の師匠 岩佐一亭・山岡鉄舟の書の真髄を学ぶ！

三野島凌雲

平成30年1月6日に毎年開催している「美しい文字を書こう！」の書き初めが地元高山市新宮小学校で、約50人の子どもたちが書き初めに取り組みました。

今年も、明治維新から150年を記念し飛騨高山・山岡鉄舟研究会と新宮まちづくり協議会の共催で開催されました。

幕末から明治にかけて、政治家や書家として活躍した高山ゆかりの鉄舟に親しんで

もらおうと、講師を受けた三野島凌雲が、美しい文字の書き方や、鉄舟と書の師匠の岩佐一亭について、歴史や心構えなどを伝えました。

私達の子どもの頃も現代も変わらず、子どもが最初に習う字は「一」です。鉄舟の書の師匠、岩佐一亭は、「一」を3年間書き続けた程、書の基本を大切にされた書の大作家です。鉄舟が飛騨高山で一亭に書の基本を学んだことが、後の山岡鉄舟の書の礎になつていきます。一文字にほとばしる強い線心を心がけ、節をつくって、スピードを変えらる。さらに人を惹きつける線を心がけると。大切なことは、たんに字をきれいに書こうとして写し書きするのではなく、書者の気力とか意気込みというものが、文字の上に現れるように心掛けると良い書になりますと説明しました。

今回は、「書の師匠 岩佐一亭・山岡鉄舟の書の真髄を学ぶ」の一部を紹介いたします。

鉄舟は、感受性の高い時期に、飛騨高山の書の師匠、岩佐一亭から学び、入木道の五十二世を継承しました。鉄舟の書の基本は、「一」の始筆から終筆までの一貫した貫通力から来ていると言われています。岩佐一亭は、名は善倫、通称市衛門は飛騨高山で生まれ、家は呉服商荒木屋の長男で家督を継いだ。が、書道への思い断ちがたく、家督を弟に譲って書道に専念しました。

鉄舟は、飛騨国高山で父朝右衛門に従って10歳から17歳まで住んでおり、師岩佐一亭に提出した誓約書「書法入門之式一札」が高山の岩佐家に保存されています。



岩佐一亭 書

鉄舟は、忠義の厚い肉厚の太い誠実な書を書いていられると云われており、技よりも精神性を重視していることが禪に絡む押印が多いことからもつかがえます。

各社中だより

第十一回 えなかな書道グループ展

市川 恵一

日時 十一月十七日～十九日
場所 恵那市文化センター集會室

恵那かな書道グループ会員による恒例の
展覧会を開催致しました。

今回は、会員二十二名による作品四十点、
若山牧水、石川啄木の短歌を主に題材とし
て小作品中心にしました。又合同作品とし
て臨書作品を一枚の板に製作してみました。



会期中は大勢の方に
御高覧頂きまして厚く
御礼申し上げますと共
に今後とも御指導お願
い申し上げます。
又今回も中日新聞社
恵那市教育委員会、恵
那市文化振興会のご支
援もいただき盛大に開
催する事が出来ました。

市展賞を受賞して

鈴木由木江



昨秋、一枚の葉書
が手元に届きました。
それは、第六十回記
念恵那美術展の受賞
通知でした。そこに

市展賞の文字を見て、一瞬目を疑い、何か
の間違いいではないかと戸惑つ自分がいまし
た。今でもその思いは有ります。

定年退職後、市川恵一先生のもと、かな
文字の書道を始め十年になります。在職
中は時間の余裕も無く、退職後は好きな事
をやりたいと始めた書道です。

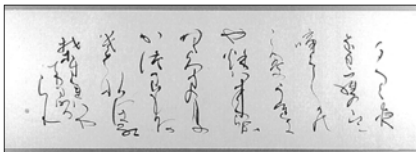
筆を持ち、無心に書き進める時間は、私に
とり心安らぐ楽しいひと時では有りますが、
壁を前にしての足踏み、迷い、等がある中
でも十年の継続が出来た事は、先生のご指
導と、教室の皆さんの存在が大きな力と成
りました。又、それが今回の受賞につなが
った事と感謝しております。

一昨年、病気の為に半年以上教室休み、
筆も握る事がありませんでした。さすがに
そうなりますと、書く気持も薄れ、ここで
筆を折るのか、それとも続けるのかの間を
気が行きつ戻りつしている中で、背中を
押して再び筆を取らせて呉れたのも教室の
仲間でした。

気持も新たに書き始めたのが古今和歌集、
今回の受賞作です。取り組が一步遅く、も
う少し書き込みたい部分が各所にあります。
只、書き進める中、雑念も、上手に書きた
いと言う気負も無く、書く楽しさだけを充
分に味わう事ができました。もしかしたら
病気になるなかつたら、その様な気持ちにな
らなかつたかもしれませぬ。

数年前、昇級、昇段の目に見える目標に
向かい、突き走っていた
時期と今とでは、書に対
する取り組みは変化しま
した。

体調と相談しながら、自
分のペースでゆっくり、
そして肩の力を抜き皆様
の力を拝借しつつ、いつ
までも頑張る事が出来た
ら幸いと思っております。
今後共、よろしくご指導
をお願い致します。



第三十五回 暢陽会展 学生書道展

日時 十月十九日～二十一日

場所 中津川市にぎわいプラザ五階

第35回目となる暢陽会展は、今回から
学生展と併催する形で開催しました。

今年は、共に書くこと「楽しもう」というテ
ーマのもと、小作品から全紙大の作品60点
と、学生の部の半切大の作品75点、故・永
治秋聲先生の3点の作品などが、会場一杯
の展示になりました。作品作りに当たって
は(公)中部日本書道会理事 後藤啓太先
生に御指導を頂きながら取組んで来まし
たし、丹念な作品助言などもして下さり
会員一同大きな拠り所をいただけました。

作品に自分は今、何を書きたいか、とい
う思いを、会員も学生も同じ様に考えて決
めて来たつもりですが、今後に向けても
自分は何が好きかを問いつつ、勉強して行
く事が大切だと感じました。

学生展併催でしたので、御家族連れでお
いで下さる人達もあり、賑やかな会場とな
りました。

会期中、御高覧賜りました、書泉本部の
伊藤明子先生はじめ、皆様に心よりお礼申
し上げます。引き続きの懇親会は台風20
号接近の中にも、楽しく歓談しました。



平成30年度 事業活動計画

事業名	予定年月日	実施開催場所
支部展	平成30年7月27日(金) 平成30年7月28日(土) 平成30年7月29日(日)	恵那市 恵那文化センター
支部集會	平成30年7月29日(日)	
講演会	平成30年7月29日(日)	
支部交流会	平成30年7月29日(日)	恵那峡 GH
企画委員会	平成30年4月 平成30年9月 平成31年3月	下呂市 中津川市 恵那市
役員会	平成30年7月 平成30年12月 平成31年2月	下呂市 中津川市 恵那市
研修会	未定	未定
支部報8号	平成31年2月1日発行	

新入会員紹介

三野島凌雲 / 阪田 華香 / 田中 凌山

編集後記

平成三十年成年の幕開けである。比較的温
かい元旦であった。全世界の人々の健康と幸
せを祈りたい。昨年は「真実」が明確にされ
ず曖昧のままの年越しとなった。真実を隠し
想像や付度でマスコミを賑わした。未解決の
まま前へ突き進んでも良いものか不安が過る。
今年こそ、真理真実をしっかりと握り覚えて日
本の進路を決めたい。濃飛支部の会員は正直
で堅実で信頼の出来る人ばかりである。だか
らこそ小さな支部、少人数でも今年も広報第
七号を発行する事が出来た。編集会議には高
山、下呂、中津、恵那、瑞浪の各地から殆ん
ど全員の出席があり、原稿依頼から校正、発
行まで力を寄せ合う。書道が好きでその仲間
が好きな良き人々の集まりだから七年も広報
が発行出来たと思う。内容も益々充実出来る
ことを祈念し発行に当たって感謝の気持ちを
述べたい。

(広報担当 中垣幸聲)

会員募集

書道の好きな方、書道を通し交流を図りた
い方、大歓迎です。

詳細は事務局まで。(担当) 大野豊景

〇五七三二二八 一三三三八